

# バイオリージョナリズムに基づく上賀茂地域での 民学連携による地域活動の展開

Development of Community Movements at Kamigamo Area by Collaboration with  
Researcher and Inhabitants based on Bioregionalism

勝 矢 淳 雄

## 和文要旨

平安京より古く 1300 年以上の伝統がある上賀茂地域は京都の北に位置し、烏相撲、紅葉音頭、さんやれ祭、やすらい花など多くの文化的行事なども伝承されてきている。昭和 63 年には国の重要伝統的建造物群保存地区（伝建地区）に選定された社家屋敷群も維持され、町並み保存がはかられている。しかし、地域の環境や地域に伝わる文化の保全・継承の努力の一方で、地域共同体の弱体化によって文化的事象の維持が徐々に失われる危機にあるのも事実である。平成 13 年以来、伝統文化の保全・継承のために子供たちの社家屋敷の見学会をはじめたが、ようやく地元に着定させる一定の目処がついた。その他の活動も順次進める中で、地元の雰囲気も好意的な方向に変化してきた。平成 17 年度は、地元との信頼関係が形づくられてきたことを受け、新たに上賀茂探検クラブとテントウムシの観察会、上賀茂神社と七夕祭、自治連合会をはじめとする地元諸団体と賀茂季鷹歌碑建立計画、上賀茂町並み保存会などと上賀茂文化フォーラムの開催、神社などと二葉葵の森の復活事業などを手がけた。いずれも地元と良好な関係のもとに進展し、さらに行事の形態をバイオリージョナリズムの理念に基づき徐々に地元住民が地元のために行う活動へと転換できるようになってきた。

キーワード：バイオリージョナリズム，上賀茂，民学連携，地域活動

Key Words: Bioregionalism, Kamigamo Area, Collaboration, Community Movement

## 目次

1. はじめに
2. バイオリージョナリズムとは
3. 過去の経緯
4. 民学連携の方法
5. 地域活動の展開
  - 5-1. 子供たちへの社家屋敷の見学会

## 56 バイオリージョナリズムに基づく上賀茂地域での民学連携による地域活動の展開

- 5-2. テントウムシの観察会
  - 5-3. 七夕祭の復活
  - 5-4. 賀茂季鷹歌碑建立の提案
  - 5-5. 上賀茂文化フォーラムの開催
  - 5-6. 二葉葵の森の復活運動
6. おわりに

## 1. はじめに

平安京より古く 1300 年以上の伝統がある上賀茂地域は京都の北に位置する。上賀茂神社あるいはその神事のみならず地域には烏相撲、紅葉音頭、さんやれ祭、やすらい花など多くの文化的行事なども伝承されてきている。また、上賀茂神社の神官（社家）の屋敷があった明神川沿いの社家町は遅くとも 15 世紀中頃には門前集落として発達したといわれており、少なくなったとはいえ今でも社家屋敷群が維持されている。今では全国的にも珍しくなり、昭和 63 年には国の重要伝統的建造物群保存地区（伝建地区）に選定され、町並みの保存がはかられている。さらに、社家町の周辺地域も平成 9 年に京都市から界わい景観保全地域に指定され、より広く地域の環境保全に力を入れている。

しかし、地域の環境や地域に伝わる文化の保全・継承の努力の一方で、地域住民の高齢化・少子化や住宅の老朽化、相続などの種々の事情から社家屋敷や旧来の民家が壊され、新たな建売住宅が建てられたり、地域の新たな開発にともなう新住民の増加などによる地域共同体の弱体化によって、文化的事象の維持が徐々に失われる危機にあるのも事実である。既に、書の賀茂流は座田司氏を最後に絶えたとし、六歳念仏もいつの間にか途絶えた。現在は紅葉音頭が存続の危機にあり、さんやれ祭も上がりになる子供がいない年もあるなど少子化の影響を受けだした。景観や町並みをはじめとする環境と文化の保全は容易なものではなく、何もしなければ現状を維持できるというわけではない。将来に向かって、上賀茂の文化の保全・継承のためには、従来と同様の形態で親から子へ地域の従来の絆を基に引き継いでいく努力と共に、地域の文化を形のみならずその意義について新住民を含めて地域の住民の理解を新たに深め、さらには社会の認識を深める努力が必要な時期に来ている。

上記のような考えを基盤として、上賀茂の住民と連携して賀茂文化研究会を設立し、上賀茂の文化資産について地域の住民や社会が地域を再認識・再評価するきっかけになることを意図して種々の地域活動を展開してきている。ここでは、平成 17 年の活動を主体に述べ、その活動が推進できた理由について考察する。

## 2. バイオリージョナリズムとは

バイオリージョナリズム（bioregionalism）とは、「生命地域主義」と訳され、とすれば離れがちになってしまった地域の自然生態系に根ざした生き方に目を向けるとともに、自然生態系だけでなく地域の文化や歴史をも見直し、再評価することによって、あらためて地域に「住み直し（re-

inhabitation)」を求める考え方であり、またその運動のことである。かつては地域の自然生態系や文化は、私たち個々人のアイデンティティの内実を構成するものであり、それは私たちに「豊かな自己」をもたらすものであった。バイオリージョナリズムは住み直しの作業をとおして、そこに住む住民自身が地域との関係を深く自覚し、地域の自然生態系を活かしながら、よりよい生活環境、文化環境を築いていくことを求めている。地域の住民が地域の自然環境のみならず地域の文化や歴史を理解しなければ、地域のあらゆる事物の保全・継承が出来ないことは当然の帰着でもある。地域における環境学習活動などがバイオリージョナリズムの精神に基づくべきことは明らかであり、本活動もそれを強く意識して行っている。

バイオリージョナリズムに基礎をおくことは、地域のことは地域の人たちが主体的に行動し、その行動の中で地域の人たちが地域のことを理解し、住み直しをするのが基本である。しかし、1300年以上の伝統をもって居住する人達から、新しい居住者までいる上賀茂地域、明治以降の居住者ですら未だに「入り込み人」あるいは「入り人」と見られるこの地域では旧来の複雑な人間関係が未だに続いており、何らかのきっかけなしに地域に新たな行動を期待するのは事実上困難であった。

住宅と農家が主で、観光を商売としているところはほとんどないため、観光客など他所の人たちが地域に来ることに根強い拒否反応があり、伝建地区では「ここは何もしないところ」との申し合わせもある。このような従来からの姿勢が徐々に町の雰囲気維持を困難にしだしている。行政も何を持ちかけても「上賀茂は動きのにぶいところ」と言っている。形骸化した町並みや行事などを残すのが地域の保全ではなく、地域の人々の生活の中で生きていて、居住する人々が愛着と誇りを感じる町でこそ本来の意義ある町づくりである。

第三者（地域に居住しない者）が適切な関与をして新たな活動を実施し、地域への新たな刺激と行動のきっかけをつくり、地域に活動を定着させる努力をするのも意義あることである。第三者であるがゆえに可能な活動があることも事実である。また、第三者から地域を見ることによって、地元の人たちが気付かないあるいは当然としてみてきた事柄にも新たな価値を見出しうる場合もある。そこに、第三者が地域の活動に関与する意義がある。地域に居住している住民が自ら新たな行動を起こし、地域に住み直しをし、地域の文化の継承と新たな文化の創造に向かうことを目標にし、そのきっかけとなるように行動することとした。

### 3. 過去の経緯

平成7年頃から上賀茂地域に関心を持ち出し、特に明神川の流れの向き、カキツバタで有名な大田の沢の水枯れなどに着目しだしていた。そして、明神川の川底低下など地域に顕在化してきている問題を少しずつ指摘しながら地域と関連を持ち出した。社家町が伝建地区に選定されているが、社家町界隈に居住している人達も何が社家屋敷の特徴であるかなどについて必ずしも詳しいわけではなく、まして子供たちはほとんど理解していない状況がわかった。実際に居住されているので、外から見ると社家屋敷に入ったこともないから当然ともいえる。そして、地域の人達の中には、子供たち

が土堀に落書きをする、魚取りで石積を緩めるなどで、将来の地域を担うべき子供たちを地域の保全のために排除する傾向もあった。このような現状を憂慮し、とくに、次代を担う子供たちにはたとえ理解が難しいとしても、地元の事物に思い出を残してもらうことが現在および将来の地域の環境保全に大切であると考え、平成12年に京都新聞が社家の土堀への落書き問題を取り上げたのをキッカケにして、平成13年に子供たちを対象とした社家屋敷と明神川の見学会を実施した。

見学会は参加者には好評であったが、ある社家屋敷の方からは大人が多かったことについて約束が違うと強い叱責も受けることとなった。また、地元の方にも不評であり、その後「ここは何もしないところ。余計なことをするな」との抗議も受けることとなった。これに対し、将来の上賀茂を守ってくれる子供たちを地域が今から育てなければならないこと、そうでなければ上賀茂の将来はないこと、見学させてもらった家の土堀に落書きをする子供はいないなどを粘り強く説得し続けた。その後も、地元の協力はあまりえられないままに平成14年も実施した。

平成14年には、上賀茂の小池で永年続けられてきている古式泳法を待鳳小学校で模範演技、共同研究者の山岸 博教授のスグキ菜の講演会を農家を主な対象に、さらに一般社会を対象に社家屋敷の梅辻家の特別公開を実施した。梅辻家の特別公開は、一般の人を対象にしたので周辺からの苦情を心配し恐る恐る実施したが、とくに何も聞くことはなかった。地元の人達も一度中を見たかったということもあったようで、多くの人を訪れた。

子供たち対象の社家屋敷の見学会は、平成15年に上賀茂小学校PTAの自由活動である上賀茂探検クラブから一緒に見学会をやらせてほしいとの申し入れがあり、勝矢研究室と共催で行った。探検クラブが協力してくれたので子供たちを集めるのに苦労することなく実施できた。探検クラブと共催できたことで、地元の見る目も少しずつ好意的な方向に向いてきたことが肌で感じられるようになってきた。商業新聞に記事を掲載してもらっていたが、これも新聞で見たということで地元の理解を得るうえで大きな効果があった。また、明神川の川底修復についての市への要望書作成に関して助言を求められ指導したが、これが実現したことも自治連合会からの信頼も得られ、地元の雰囲気が良い方向に向かうキッカケとなった。

平成15年には、雰囲気が良い方向に変わったと感じられたのを機会に、子供たちを主とした行事から社会を対象にしたものまで種々の活動を開始した。子供たちを主な対象にした社家屋敷の見学会、小池の古式泳法の模範演技（柊野小学校）、火星大接近にあわせ火星についての講演と観望会（上賀茂小学校）、一般社会を対象に社家屋敷である梅辻家の特別公開、上賀茂の文化の保全・継承と社会への発信を目的に賀茂文化研究会を設立し、シンポジウム「上賀茂の文化を語る」を開催し、さらに会誌「賀茂文化」を発刊した。賀茂文化研究会は現在130名の会員を擁する団体に発展した。また、賀茂文化研究会がトヨタ財団から2年間にわたり助成を受けることが出来たのも活動の大きな助けとなった。平成16年も地元の雰囲気が良くなったことにより、活動がやりやすくなり同様の種々の活動を継続して実施した。

#### 4. 民学連携の方法

地域と大学の連携が全国的に行なわれたしたが、その形態を見ると連携の程度について大きく4つに分類される。

- 1) 大学が組織として、大学の存在する地域の特性に関する調査・研究を進めるセンターを立ち上げ、そこに他大学、地域の行政、住民などが必要に応じて協力・連携する。あるいは大学の教育内容に合わせて、その実習・体験を組み込みつつ地域社会へのボランティア活動として各種センターを立ち上げ推進する。大学組織が主導的に進める連携。長期的な活動が可能であり、研究面への貢献、教育面への貢献も大きいと考えられるが、大学の方針が中心となり、地域の意見がどれほど反映されるか、あるいは運営に参加できるかについては困難な場合もある。
- 2) 大学のゼミ、学生グループが地域の商店街や組織と連携して町おこしやボランティア活動などを進める。大学組織は直接的には関与せず、大学の個々のグループが地域組織と対等に連携して進める。学生と地域がNPO団体を組織する場合もある。学生の卒業やテーマによっては長期的活動が難しいことがある。地域の組織が続かないこともある。多くの大学で試みられて、ゼミで長期に携わっている場合もある。一般に新聞などに取り上げられているのはこのような連携の場合が多い。
- 3) 大学の研究者やゼミが地域の組織と協力しながらも、地域主体の組織を立ち上げ、大学の研究者、ゼミが連携・協力する。大学組織は直接には関与しない。
- 4) 大学が、地域住民や自治会などの地域の組織に大学の施設などの場所を提供し、活動の支援をする。大学は組織の運営などに直接には関与しない。

上賀茂地域での民学連携は、①大学の地域貢献への意識があまり高いとは言えず、大学組織の協力が得られ難く感じられること、②上賀茂の文化的レベルが高いこともあり、長期的に安定した運営を行なうためには地域主体の組織とする方が大学の意向に左右されないこと、③および周辺に存在する多くの大学・研究機関と連携するためには一大学にとらわれない方が望ましいことなどから、上記の3)の形態をとることを目指して活動を進めた。そのため、研究室やゼミによる地域での活動にも地域の組織を主催にしたり、共催にしたりしながら、徐々に地域の組織に活動を移行するように進めている。さらに、上賀茂地域の問題の一つは、それぞれの目的によって多くの団体が存在し、これらの団体間の連携が必ずしも良いとは言えないことである。そこで、これらの地域の組織を横断的に包括する形で地域を主体にした組織として上記のように賀茂文化研究会を立ち上げた。これには、上賀茂神社、賀茂県主同族会、自治連合会、町並み保存会、上賀茂探検クラブなど地域を代表するほとんどの組織が関与している。組織の運営などはまだ研究室が事実上は支えているが、将来的にはバイオリージョナリズムの精神を基盤にして地域を主体にする自立した運営を目標にしている。

なお、上記2)の形態で、2つの連携活動を進めようとしたがうまく機能しなかった。一つは、ある学生から地域の活動を手伝いたいとの話があり、ちょうど手伝ってくれる学生がいなかったかと相談を受けていた上賀茂探検クラブを紹介した。しかし、学生は一度だけ活動に参加し、ささやかではある

が歓迎会も開いてもらったが、その後は連絡をしても何の返事も学生からこないということで終わった。十分大丈夫と思われる学生であったので仲介をしたが、うまくいかなかった。このようなことも珍しいことではないと思うが、上賀茂探検クラブとはまだ十分な関係が出来ていないので、信頼関係を傷つけないように今後は慎重な対応が必要である。もう一つは、自治連合会から他大学でも地域と地元の大学の学生たちとの連携した活動が新聞に載っており、上賀茂で進めているある計画について学生さんの意見も聞きたいので手伝ってもらえないかとの話があった。ある講義で学生たちに話をし協力体制を整え、自治連合会へも学生を連れて挨拶にも行った。しかし、その後、自治連合会からは何の話もないまま終了した。後に聞いた話では、計画が中断したとの話であった。学生は単なる無料の労働力というわけではなく、学生との協働ということが、あるいは講義と言うものがどうあらねばならないものかについて、自治連合会では十分には把握されていないことを認識しておくべきであったというのが反省である。相互の立場を理解することの難しさを感じた事例となった。

## 5. 地域活動の展開

勝矢研究室や地元の有志と協力して設立した賀茂文化研究会への地元の雰囲気がかつての批判的な見方から好意的な方向へ転換しだし、さらに地元貢献してくれているとの認識を得られるようになってきた。それ故、平成17年度はさらに活動を一步進めると共に、その基本的なスタンスをバイオリージョナリズムに基づく地元のための地元住民による活動へと転換していくように努めた。従来の活動は、研究室が主導的に進め、それに地元の団体を形式的に共催などとしていたが、可能なものから順次地元の団体に移行させると共に、新たな活動では実質的に共催である内容とするようにしだした。

### 5-1. 子供たちへの社家屋敷の見学会

平成13年からはじめた見学会も5年目になり、その間、上賀茂探検クラブとも協力関係ができた。順次、上賀茂探検クラブに実質的な世話を移行していったが、平成17年度では主催は上賀茂探検



写真1 社家屋敷の見学会

クラブとして、勝矢研究室は協力とし実質的な取り組みも当日の協力とパンフレットの作成のみとした。それ以外の社家への依頼、当日の説明なども上賀茂探検クラブの保護者の方に任せた。参加者は、子供たち20名、探検クラブの保護者11名、大学関係者3名であった。名実共にバイオリージョナリズムに基づく上賀茂探検クラブの行事となった。ただし、探検クラブの新しい部長の方針で、来年から1年おきにしたいということであったが、探検クラブに任せただけだったのでその方針に従うこととした。1年おきに

すると人間関係などを繋いでおくのが難しくなることもあり、継続して開催できるか危ぶまれるところもある。今後の展開をみていくことになるが、子供たちが地元の文化資産である社家屋敷を身近に見せてもらうということは地元への愛着を育む大切な体験と考えているので、消滅すればまた別の方法・形態ではじめることを模索しなければならない。

#### 5-2. テントウムシの観察会

共同研究者の野村哲郎教授が、上賀茂地域を含め全国のテントウムシの種類について、その分布状況を調査している。気温変化によって優先種が異なってくることがわかっており、40年前に調査したデータがあり、それと比較・検討をしている。上賀茂地域でもかつてより温暖化の傾向にあることが、テントウムシの観察からも明らかになってきた。テントウムシが子供たちにも興味ある対象であり、さらに温暖化と結びつけて話も出来ることから、子供たちの観察会を上賀茂探検クラブに持ちかけた。上賀茂探検クラブが主催し、指導を野村哲郎教授と野村研究室の学生が行い、平成17年5月14日に実施した。子供達24名と保護者16名の参加があり、飼育などの指導も行い好評に終了した。上賀茂探検クラブと研究者をうまく結びつけることができた。上賀茂探検クラブの保護者からは、どこにどのような専門家がいて協力してもらえるかの情報がなかなか得難いこともあり、このような仲介をすることも大切である。従来も述べたが、協力してもらえる文化資産や環境資産、人材を収集・記録し必要なときに活用できるように環境バンク（銀行）の創設を提案したが、上賀茂探検クラブの都合もあり行事が1回切りで終わっても、協力してくれる研究者との関連が切れることがないようにすることが大切であり、今後の課題である。

#### 5-3. 七夕祭の復活

上賀茂神社との話し合いの中で、8月に行事が少ないので何らかの行事が出来ないかとの相談があり、その中から明治になり百数十年間途絶えてしまった七夕祭を復活できないかとの案が出された。地元をはじめ社会の多くの方に神社のみならず賀茂文化研究会にも関心をもってもらい、さらには勝矢研究室の活動にも興味をもってもらうことが、今後の活動の発展に重要であることから、実現に向けての取り組みを相談した。賀茂文化研究会の活動に関しても地元の若い層に関心を持ってもらいたいのであるが、なかなか古いことへの関心と呼ぶのは困難な状況であり、できるだけ興味を持ち参加してもらえる行事を通じて関心を高めることが大切と考え、上賀茂探検クラブにも協力を依頼した。七夕祭に関する古い記録が神社にも無いこともあり、子供たちが喜ぶ行事を主体として構成することとした。

七夕飾りは上賀茂探検クラブの子供たちと保護者、乗馬体験となわとびは勝矢研究室がそれ



写真2 テントウムシの観察会

それぞれの学生のクラブに協力を頼み、よさこい踊りの実演は上賀茂神社から依頼をした。呼び物として長浜の国友鉄砲研究会による火縄銃の実演は大きな反響を呼ぶと考え賀茂文化研究会が交渉した。また、従来単独で行っていた火星や月のクレーターの観望会をこの七夕祭で行うことにした。平成17年8月14日(土)に開催することとした。当日はお盆に入るために日程としては良くなかったのであるが、その前々週と前週は地元の上賀茂祭が予定されており、これとかち合うことがないようにするために避けざるを得なかった。そのため、折角、七夕飾りの作製に一所懸命取り組んでもらった上賀茂探検クラブ

の保護者や子供たちはお盆で郷里に帰るなどで参加してもらえない方が多くなってしまった。

当日は小雨交じりの曇りのため、懸念したが多くの行事は成功裡に終了した。月のクレーターの観望会は雲で月が見えないために中止、なわとびは足元が濡れているので滑って危ないとのことで中止した。祭事に引き続き行った火縄銃の実演は、その音などの迫力に予想通り大きな反響であった。事前に周辺住民には説明のビラを配布していたが、110番通報があるという事態も起こったが、入念な警察との打ち合わせの上であったために事無く進行できた。乗馬体験は、子供たちのみであるが、乗馬する子供たちより保護者の方が喜んで写真をとるなどで楽しんでもらえた。上賀茂探検クラブの七夕飾りは、最初は笹2本ぐらいを考えていたのであるが予想より豪華なものとなり、多くの人が写真を撮っていた。ただし、来年からの開催について神社は開催を決めたが、これほどのものが出来るかについては労力の点からも課題がある。

主催を賀茂文化研究会と上賀茂神社、協力を上賀茂探検クラブと京都産業大学勝矢研究室として実施したが、神社とともに主催することで賀茂文化研究会が社会的に認知される上で大きな意義のある行事であった。毎日新聞と京都新聞が記事にしてくれた。毎日新聞は賀茂文化研究会のことを、京都新聞は京都産業大学の馬術部の馬の試乗などを取り上げてくれた。神社からも相談を受ける団体として賀茂文化研究会が位置づけられたことも大きな成果である。七夕祭終了後、自治連合会の世話人から地元で行っている上賀茂まつりと一緒に出来ないかとの相談があった。今回はかち合うことをむしろ遠慮した



写真3 上賀茂探検クラブの七夕飾り



写真4 京産大馬術部による乗馬体験



こともあり、一緒に出来たほうがより賑やかになり、地元との結びつきも深まりより望ましいものである。自治連合会と神社との仲介をし、来年度は同じ日に協力して開催する方向となった。

#### 5-4. 賀茂季鷹歌碑建立の提案

江戸末期に活躍した上賀茂出身の歌人として、賀茂季鷹（1754～1841）がいる。上賀茂神社の祠官を務め、かたわら歌仙堂を建て、多くの門人や友人たちと歌会を催した。都はもとより地方からの訪問客も絶えなかったということである。季鷹の本姓は山本といい、現在も歌仙堂や本宅の雲錦亭が残されており、子孫にあたる90数歳の山本須磨子氏がおられる。

上賀茂は地元が輩出した人物を顕彰することが従来行われておらず、賀茂季鷹に限らず、誰の顕彰碑なども存在しない。過去、色々な話が出されたようであるが、どのような人物が候補に挙がっても必ず反対する人がおり、反対する人が一人でもあれば全体の融和を考え実現出来ないというのが地元組織の欠点であった。賀茂文化研究会は、賀茂季鷹の歌碑の建立を計画し、賀茂文化研究会のメンバーである地元のK氏に相談したところ、直ぐに京都市に相談された。京都市は、乗り気ですぐさま賀茂文化研究会の地元の主要メンバーと協議を持ち、実現へ向けての候補地の現地調査を一緒に行った。京都市から出された大きな条件は、候補地が何らかの形で公的性格をもっていることと、地域住民の全員の賛成が得られていることであった。第一の候補地であった山本氏宅は、京都市が平成9年に指定した上賀茂郷界わい景観整備地区の界わい景観建造物に指定されていることから京都市の了承が得られた。第2の住民全員の賛成については、上賀茂の主要団体に順次声を掛け、あるいはかけてもらい、これらを網羅した歌碑建立委員会を設立し、その賛成をもらうことにした。色々と紆余曲折があったが、平成17年8月9日に第一回の会合が開催できた。構成メンバーは、上賀茂自治連合会、上賀茂社会福祉協議会、上賀茂町並み保存会、明神川美化保存会、賀茂文化研究会である。ここでも種々の意見が出たが、筆者が議長を務め最終的には全員の賛成が得られた。条件は、歌碑を建立する山本氏との間に土地の貸借についての契約書を交わすことなどであった。これは後日、契約書を交わし他の条件も満足させた。これによって京都市の了解も得られ、地元をはじめ賀茂文化研究会会員に募金活動をはじめることとなった。社家の集まりである賀茂県主同族会は、他の団体からの暗に反対もあり歌碑建立委員会には参加していないが、寄付については呼びかけることとした。賀茂季鷹が社家の出身であることから関心が高いことが予想されたためであった。

12月には京都市の助成が予算に組み込まれ、平成18年3月に承認された。3月時点には、ほぼ建立できるだけの寄付が集まっていたが、地元の関心を盛り上げるためには、金額ではなしに協力することによって、地元上賀茂への関心



写真5 第一回賀茂季鷹歌碑建立委員会

を高め愛着をもってもらふこと、そして地元への誇りを持ってもらふために、自治連合会と協議して再度回覧板を回してもらった。予想以上の関心があったことで、目的が達せられたと考えている。現在、京都市の最終的なゴーサインを待っている状況である。

賀茂文化研究会が地元へ提案したことについて、地元が真剣に取り組んでももらったことは大きな前進である。研究会が地元からも信頼される団体として認知されたことを示している。

#### 5-5. 上賀茂文化フォーラムの開催

過去永年にわたって、北消防署が準備し当日の世話もし、上賀茂町並み保存会などが主催する形で、1月に文化財防火研究会が開かれ講演などがなされてきた。ところが、平成17年度は北消防署が一切の世話を辞退してきたために、防火研究会の開催が困難となった。北消防署の担当者が退職したことによって、消防署の方針が変わったようである。このことについて、町並み保存会会長からどうしたらよいかとの相談を受けることとなった。永年にわたって開かれてきたもので住民もいつものように開催されると思っており、参加者も毎年30～40名ある行事なので、ここで止めてしまうのは惜しいということで町並み保存会、自治連合会、賀茂文化研究会の意見が一致した。講師の世話、回覧の作製などを賀茂文化研究会および勝矢研究室が引き受け、町並み保存会で上賀茂小学校のふれあいサロンを借り、当日の受付を自治連合会が引き受け平成18年1月29日（日）に開催できた。

講演については、平成16年に上賀茂学区の各種団体が協力して「安心・安全のまちづくり」のアンケートやワークショップが行われており、この調査結果の報告をお願いした。上賀茂地域は歴史も古く、自治連合会などのそれぞれの組織のまとまりも良いので、従来から多くの研究者が研究材料の収集に地域に入ってきているが、ともすれば、その結果について地元へ還元されることが少なかったきらいがある。そのような機会を地元が作ってこなかったことにも一端の原因があるとはいえ、研究者の自覚のなさには大きな問題である。今回は、その点で有意義な講演会になったし、今後もこのような形での会としていきたい。賀茂文化研究会は今後も講演者の紹介などを通じて共催として協力していく予定である。賀茂文化研究会あるいは勝矢研究室が地元から相談を受けるようになったことは今までの活動が認められたことで大きな成果である。

#### 5-6. 二葉葵の森の復活運動

上賀茂神社の神紋は二葉葵（注、神紋の場合は二葉葵と書く慣わしであり、植物の場合は双葉葵を書く）である。5月15日の賀茂祭を葵祭というのは、祭りの行列に参加する牛車から奉仕する人達まで、すべてに双葉葵が飾られるからである。この双葉葵もかつては神社の境内や周辺に多数自生していたと考えられる。身近にたくさんあったから飾りにすることも出来たわけである。しかし、今は葵祭のために北の山奥に採集に行っている。今年も7千本以上を採集しているが、年々山奥に採集に行かなければならないと聞いている。双葉葵が神社周辺からほとんど消失してしまった原因は温暖化や人の往来など種々あると思われるが、地元では植木鉢などで育てている方も多くある。それ故、条件がそろえば再び双葉葵を復活させることも可能と考えられる。

神社のM氏から双葉葵の復活をする運動を進めたいのであるが、どうだろうかとの相談を受けた。

自然の復活と言うことで環境を大切にしようとする時代によく合っているし、何より地域から新たな提案がなされてきたことも重要で、この芽を育てていくことが賀茂文化研究会の大きな役割であり、バイオリージョナリズムを標榜している上賀茂での一連の活動の根底をなす理念である。そのようなことから積極的に助言・協力することとし、実行委員会を立ち上げ、委員4名のうち賀茂文化研究会から2名が名を連ねた。小学校の総合学習の1つとして取り上げてもらい、さらに地元をはじめ一般にも広め

ていくこととして活動をはじめた。平成18年4月11日（火）は雨であったが、上賀茂小学校の6年生、PTA、その他関係者で初植え式を神社で行った。祭事に引き続き、児童たちが3人一組になって、それぞれプランターに双葉葵を植えつけた。これらを小学校に持ち帰り4、5、6年生で栽培をし、3月には卒業記念に神社に整備した葵の森に植える予定である。

活動は広がりを見せており今後の発展が期待される。地元から新たな活動が提案され、賀茂文化研究会が助言し、協力するという位置づけが出来たことは望ましいことであった。今まで積み上げた活動の成果である。

## 6. おわりに

上賀茂地域に着目して研究をはじめたのは平成7年からで、具体的な活動は平成13年からになり5年目となった。ようやく地元でも勝矢研究室と賀茂文化研究会が認知されるようになった。古い伝統的な地域であり、かつ組織ごとにとままりの強いところであったために、地域の中に入り込み信頼を得るまでに時間がかかったし抵抗も大きかった。今では多くの行事にかかわりを持つようになり、主体的に取り組んできた活動もバイオリージョナリズムの理念に従い徐々に地元の人達による地元のための活動へと転換するようになってきた。また、地域の中から新たな活動の動きが出てきたことも大きな成果である。種々のことで相談を受けるようになったことも信頼されるようになった一つの現れであると評価できる。地元からの信頼を得られるようになったことが、種々の活動が軌道に乗るあるいは乗せられるようになった基本的な点であるが、平成17年度は、地元貢献7～8割、研究2～3割であったといってもよい状況であり、ある時期には位置の確保のためにこれも仕方がないが、地元も育ちだしたこともありやはり5割、5割から逆転した比重に徐々に戻したいと考えている。地元の方々と話をする中で、地元の協力をえて研究を進めながら、その成果を地元還元しない、あるいは地元からの依頼には容易に出来ることでも放置している研究者が多いことがわかり、これが研究者への不信感を醸成してきていることが理解できた。これからは研究者の姿勢が厳しく問われる時代にな



写真6 双葉葵の植つけ

ることを自覚しなければならない。

大学には直接的には関わらない形で地元主体の賀茂文化研究会を設立したことが、活動が無用な縛りを受けることもなく小回りが利いて臨機応変に対応できたことも有効であった。平成18年度はシンポジウム「上賀茂の文化を語る」第4回（賀茂季鷹とその時代）を大谷大学で開催し地域的な広がりを進めるが、これも一大学にこだわらずに活動できる利点である。一方で、研究面としての大学からの助成は研究実践活動の円滑な展開に大きなプラスになったのも事実である。

今後の活動の展開のためには、若手の協力者の体制を構築することが大切である。上賀茂探検クラブはその一つではあるが、部長の交代などすると必ずしも安定しない状況にあり、長期的な協働が可能な団体あるいは個人を発掘することが必要である。一般的には若い層は仕事に追われていることもあり、地元のことには関心は薄く、選挙の投票率を見てもこれは明らかであるが、若手の参加・協力は活動の継続的な発展のためには将来的に大切な課題である。

本研究を進めるにあたっては、地元の多くの方々および大学関係者のご協力や有益なご教示もいただいた。ここに記して感謝する次第である。なお、本研究は京都産業大学総合学術研究所からの助成を受けた。

## 参考文献

- 1) 井上有一, Alan Drengson 共編「ディープ・エコロジー」昭和堂, 平成14年(2002)3月
- 2) 勝矢淳雄, 河野勝彦, 齋藤萬之助, 久力文夫「バイオリージョナリズムに基礎をおく社家と明神川に関する環境学習」環境技術, 第32巻, 第3号, 61～68頁, 平成15年(2003)3月
- 3) 勝矢淳雄, 河野勝彦, 齋藤萬之助, 久力文夫「バイオリージョナリズムに基礎をおいた上賀茂文化の保全・継承とその展開」京都産業大学総合学術研究所所報, 創刊号, 平成15年(2003)8月
- 4) 勝矢淳雄, 齋藤萬之助「上賀茂地域におけるバイオリージョナリズムに基づく地域研究とその展開」京都産業大学総合学術研究所所報, 第2号, 平成16年(2004)8月
- 5) 勝矢淳雄, 齋藤萬之助「バイオリージョナリズムに基礎をおいた上賀茂社家町での環境学習の展開」京都産業大学総合学術研究所所報, 第3号, 平成17年(2005)7月
- 6) 京都新聞(朝刊)「賀茂の自然や文化を考える」平成17年(2005)10月19日
- 7) 京都新聞(朝刊)「七夕祭復活」平成17年(2005)8月14日
- 8) 毎日新聞(朝刊)「火縄銃実演も」平成17年(2005)8月14日
- 9) 京都新聞(朝刊)「賀茂季鷹歌碑建立へ」平成17年(2005)8月25日
- 10) 京都新聞(朝刊)「市文化財の梅辻家住宅, 12日に特別公開」平成17年(2005)11月10日
- 11) 朝日新聞(朝刊)「育て! フタバアオイの森」平成18年(2006)4月12日
- 12) 京都新聞(朝刊)「『葵の森』復活願い」平成18年(2006)4月12日